

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 金 森 史 枝

論 文 題 目

大学時代の正課外活動と社会人生活との関連に関する研究  
－「体育会系は就職に有利」という言説に着目して－

論文審査担当者

主 査

名古屋大学総合保健体育科学センター教授 蛭田秀一

名古屋大学総合保健体育科学センター教授 佐々木康

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 内田良

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、「体育会系は就職に有利」という言説を分析枠組みとして用い、学生が大学の正課外活動を通してどのような能力を培っているのか、また、大学時代の正課外活動の取り組みが就職やその後の社会人生活にどのような影響を与えているのかという点を、複数の量的研究と質的研究によって明らかにすることを目的とするものである。そして、得られた結果にもとづいて大学教育における正課外活動の意義についての検討を加えている。

なお、本論文では「体育会系は就職に有利」という場合の「就職」について、採用段階だけでなく就職後の昇進・昇格を含めた社会人生活の状況を含めて論じている。また、正課外活動について、大学公認の運動部を「体育会運動部」、体育系のサークルを「体育系サークル」とし、両者を包括する場合は「体育会系」と表記している。「文化部」と「文化系サークル」についても同様であり、両者を包括する場合は「文化系」と表記している。

以下に各章の概要を示す。

序章では、本論文が大学から社会への接続問題を捉えるに当たって、「体育会系は就職に有利」という言説を分析枠組みとして用いる背景と意義を述べている。かつて、わが国の高度成長期を支えた時代の働き方には、「体育会系神話」という言葉に象徴されるように、体育会運動部出身者がもつ体力や精神力などの特性が貢献したと考えられていた。しかし、1990年代以降の経済状況等の変化に伴って、大学生の就職を取り巻く環境も変化してきており、「体育会出身者は就職に有利」という言説もその信憑性が揺らいできている。そこで、「体育会出身者は就職に有利」の言説についての現状を把握し、そこから大学における正課外活動の意義を論じるために行われた学生および社会人を対象とした本論文を構成する9つの研究について、それぞれの位置づけと関連を整理している。

第1章では、先行研究の検討から、「体育会系就職」が着目されるようになった時期は大正時代から昭和初期であり、それ以来現在に至るまで「体育会系は就職に有利」という言説は一般的に用いられてきたことを確認した。その一方で、近年「産業界が大卒者に求める能力」の変化に伴い、この言説について一部否定的な論調が出始めてきたことを指摘した。そこで、この議論の余地のある「体育会系は就職に有利」という言説の検証をとおして検討すべき次の2つのリサーチクエスチョンを設定した。①大学の正課外活動（特に体育会系）を通してどのような能力を培っているのか、②大学時代の正課外活動の取り組みが就職やその後の社会人生活にどのような影響を与えているのか。

第2章では、近年増加傾向にある「何事もほどほどに」大学生活を送る学生に着目し、「現役大学生の特性」を検討する2つの研究（研究1・研究2）を行った。その結果、「何事もほどほどに」に該当する学生には、従来型の活動度が低い学生に加えて、

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

活動度がかなり高い学生も含まれていることを明らかにした（研究 1）。その一方で、「何事もほどほどに」について、現役大学生の半数以上は従来型の「ネガティブ志向＝非主体的」の解釈をしており、それは「主体的になれない態度」という特性として示された（研究 2）。これらの結果から、「何事もほどほどに」大学生活を送る学生イメージについて、その扱いには注意を要することを指摘した。

第 3 章では、「現役大学生のうち体育会運動部に所属する大学生の特性」を把握する目的で 3 つの研究（研究 3～5）を実施した。「研究 3」では、体育会運動部に所属している現役大学生について、その約 7 割を占める週 3 日以上活動している者は、週 3 日未満の者と比較して「忍耐力・継続力」、「精神力・集中力」といった自分自身を高める力の獲得意識がより強いことを示した。「研究 4」では、体育会運動部の現役大学生がその活動を通して習得していることについての自由記述を分析し、「人間関係・上下関係・礼儀作法」「チームワーク・協調性・仲間」「体力・競技技術」「努力・忍耐力・精神力」「社会性・教養・経験」「人間形成・思考力」「主体性・リーダーシップ」「コミュニケーション力」に分類される力に整理した。「研究 5」では、運動部に所属しながら医師を目指す大学生 A さんに着目し、競技としてのスポーツと学業のバランスの取り方に幾度となく悩みながら、将来の夢である医師という職業を目指して直面する課題を克服していく過程を質的に分析した。その結果、勉強との両立を図る際の葛藤とその克服を繰り返し精進していく「現代的文武両道モデル」と、日々のひたむきな努力の過程から「計画的偶発性の現出モデル」を導出した。

第 4 章では、「大学時代の正課外活動の違いが社会人生活にどのような影響を与えているのか」について検討するために 4 つの研究（研究 6～9）を実施した。「研究 6」では、体育会運動部と体育系サークルとの所属の違いに着目して、社会人（N=400）を対象に「社会人である現在の意識」22 項目の回答について、大学時代の「所属」と「勉強との両立」による二要因分散分析を行った。その結果、所属間に大きな違いはみられなかったが、仕事の満足度を含む一部の項目で「所属」と「勉強との両立」についての有意な交互作用がみられ、体育会運動部所属者において両立者の方が有意に高い得点を示した。また、勉強との両立の主効果として、両立者の方が忍耐力、コミュニケーション力、人間関係構築力について有意に高い認識を有していることを示した。

「研究 7」では、社会人（N=600）を対象として、大学時代の正課外活動の所属を体育会運動部、体育系サークル、文化部、文化系サークルに分けて研究 6 と同様の分析を行った。その結果、男性では勉強と両立していた体育会運動部所属者は最高得点の項目が多かった。一方、女性では勉強と両立していた文化部や文化系サークル所属者にも得点の高い項目があり、男性に比較して所属の違いの影響は小さかった。これらの結果から、「体育会系は就職に有利」という言説の成立には「勉強との両立」という付帯条件が必要であることを示した。「研究 8」では、さらに分析対象者を拡大して、大学

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

時代の正課外活動の違い（体育会系、文化系、他の取り組みをしていた、何もしていなかった、の4区分）が社会人生活における仕事の充実度やワークライフバランスにどのような影響を及ぼすのか、また、現在のスポーツ実施状況の有無が社会人生活とどのように関係するかという点について検討するために、社会人（N=800）を対象に「所属」と「現在のスポーツ実施状況」による二要因分散分析を行った。その結果、男性の体育会系出身者はほとんど全ての項目でトップの得点であり、「体育会系は就職に有利」という言説が、男性では他の所属との比較において通用していることを示した。また、現在のスポーツ実施状況については、男女ともに「希望どおり昇進ができている」を含め社会人生活の充実に関係していることを示した。「大学時代の過ごし方」についての15項目を説明変数として用いたロジスティック回帰分析の結果として、大学時代に体育会系に限らず「体を鍛えていた」ことが、「現在のスポーツ実施」の有無と密接に関連していたことから、そのことがスポーツ活動を伴ったポジティブな社会人生活の実現につながっていると推察した。「研究9」では、幼少期から取り組んだ剣道を通して培った力が仕事にいかにか活かされたかについて、ある大企業に勤務していた男性へのインタビューデータを質的に分析して考察した。その結果、この男性は剣道で培った「観見の目付け」に代表される見る力などを発揮して、従業員を観察し小さな異変を察知しており、それが社内のメンタルヘルス問題の早期発見及び適切な処置から復職支援の整備に至るまで問題解決に貢献できたのではないかと考察した。

第5章では、上記9つの研究を通して得られた知見を基に、総合考察を行った。男性の体育会系出身者は、社会人として有用とされる本論文で設定した自覚的能力を有している割合が高い傾向にあり、「体育会系は就職に有利」とみなせることができるが、それには「勉強との両立」が求められることを明らかとした。この背景として、スポーツと勉強との両立に葛藤と克服を繰り返して、身体鍛錬を含めた自己研鑽に励み人格を陶冶していくことによって、職業キャリアの形成に必要な力を他の活動の者と比較してより多く得ていることが考えられるとし、これらの力を社会人生活において日々直面するさまざまな課題に対峙するたびに、課題の特性に応じて組み合わせ融合させて解決のための力に「変換」しているのではないかと考察した。

終章では、本論文で得られた知見をまとめ、残された課題と展望を述べている。大学の正課外活動がその後の社会人生活にどのような影響を与えるかは、大学時代の正課教育やその他の取り組み、また、大学以外の環境や社会的背景により、さらに世代によっても異なるものである。しかし、時代や社会的背景が異なっても正課外活動という学生の主体的な取り組みから涵養される力は、社会人となってさまざまな課題に直面した際に解決し乗り越えていく大きな力の一つとなることを指摘し、大学側の正課外活動に対する具体的な支援の重要性を論じている。

別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

本論文の特色および学問的貢献として特筆すべき点は次の4点である。

- ①従来から巷間に流布していたが学術的な分析がほとんどなされていなかった「体育会系は就職に有利」という言説について、社会調査と統計分析による体育会系出身者と他の正課外活動経験者との比較からその実情の一面を明らかにし、その結果をもとに正課外活動についての意義を論じた点に特色があること。
- ②社会人の認識から「就職に有利」に関係する条件として、学生時代の「勉強との両立」が重要であることを示したこと。
- ③社会人を対象とした男女別の異なる正課外活動経験の比較から、相対的に最も「就職に有利」なのは「勉強との両立」をしていた男性の体育会系出身者であることを明らかにし、「体育会系は就職に有利」という言説に合致するのは、体育会系男性のうちの一部に限定されることを示したこと。
- ④大学時代の正課外活動について、体育会系所属の如何にかかわらず、勉強との両立と社会人になってからのスポーツ活動が、それぞれ社会人生活の充実と自覚的能力に関係していることを示したこと。さらに、社会人生活におけるスポーツ活動について、体育会系出身者が学生生活の時からすでにスポーツ習慣を有していることの優位性を指摘したこと。

一方、本論文に対して、審査委員からは次のような疑問点、問題点の指摘や助言が出された。

- ①主に意識調査および回顧調査によるデータ分析を行っているが、客観的データの分析が必要ではないか。
- ②「主体性」を検討するために、別の調査項目があってもよいのではないか。
- ③対象者の属性を絞り込めば、より明確な結果が示されるのではないか。
- ④社会人について、所属する企業の規模・業種等の違いや職種・職位の違いが結果に影響するのではないか。
- ⑤社会人について、男女別の特徴は述べられているが、年齢層別の検討も必要ではないか。
- ⑥大学時代の異なる正課外活動間の比較において、男性に比べ女性ではあまり明瞭な結果が示されていないことをどのように考えるか。

これらの指摘について、博士学位請求者は本論文の制約と限界を踏まえた上で具体的な説明を行い、その応答もおおむね妥当、適切なものであった。また、指摘された課題についても本論文の評価を損なうものではなく、今後の研鑽、研究によって補うことが十分に可能であると判断できるものであった。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を「博士（教育）」の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。